

平成28年度 アドバイザー派遣事業実施レポート

加茂中学校・溝口中学校合同研究会
会 長 山 本 正 史

1 第1回授業研究会

- 実施期日：平成28年10月20日（木曜日）
- 実施場所：米子市立加茂中学校
- アドバイザー：中京大学 国際教養学部 杉江 修治教授
- 研修のまとめ

「学習課題は適切であり、振り返りの時間が確保されていたか。」「生徒が学びの見通しをもち、学習に主体的に参加するしかけがあったか。」「ともに学び、ともに高め合う授業の工夫が見られたか」の3点を共通実践として、3学年で授業公開を行った。

指導助言としては、生徒の学習観が「教えてもらうことが勉強」となっていないか、また、生徒の学力観が「正答を出すことが学力」となっていないかという指摘があった。昨年度に比べ、「子どもが自分自身で学ぶ」場面が増えたと感じたが、依然として、「先生に言われたことをやっている（何かあると先生を呼ぶことが多い）」「『発表』がただ発言するだけに終わっており、みんなに伝えるところまで至っていない」、常に「教科書とどう結びついているか（家庭学習の手がかりは教科書にある）」を考える必要があるなど、すべての教員にとって大変参考となる多くの示唆をいただいた。

2 第2回授業研究会

- 実施期日：平成29年1月26日（木曜日）
- 実施場所：伯耆町立溝口中学校
- アドバイザー：中京大学 国際教養学部 杉江 修治教授
- 研修のまとめ

指導助言において、最も印象に残ったのは、「単元計画の工夫」と「深い学びの仕掛けを」という話であった。「単元計画の工夫」について話をされる際に、杉江先生は「カリキュラムマネジメント」という言葉が使われたが、これは今後本校が、より一層協同学習やアクティブラーニングを推進していく上でのキーワードになると考える。例えば、通例では10時間で終える単元を8時間で終え、残りの2時間で生徒を深い学びに導くような単元計画とその実施を、ということである。そして「深い学び」のある授業とは、授業の中で生徒同士が「なぜ」という問いかけをし合ったり、説明を求め合ったり、生徒自らが学ぼうという意志を持って自ら動いたりしている授業である。他にも、めあてとゴールの一本化、授業者の効果的な生徒への関わり方など、協同学習の基本を全職員で確認する機会ともなった。